

第3講：ほこり

岡田 正彦 Masahiko Okada

森 洋明 Yomei Mori

【教理編】

岡田正彦

天理教の教理を理解するうえで、「ほこり」は極めて重要な用語である。また、心と身体、さらには世界との相関関係について、親神の守護を通して説く教理は、天理教の人間観や世界観の根幹となる教えでもある。

しかし、心と身体の相関関係を説き、日常生活における精神状態や他者と接する際の心遣いを戒める教え自体は、必ずしも独創的なものではない。「ほこり」の教理をある種の倫理思想として抜きだし、同時代の通俗道徳や修養論と比較すれば、かなりの共通項を見つけることも難しくはないだろう。

しかし、天理教の「ほこり」の教理は、教祖を通して伝えられた「教え」の全体的な枠組みに位置づけられて、はじめて意味を持つことを忘れてはならない。「ほこり」は、この世界と人間に本来与えられている可能性である、「陽気ぐらし」の実現を妨げているものとして説かれているのであって、立身出世や処世の術として説かれる通俗道徳とは一線を画する。ほこりを払うことで実現されるのは、個人の生活の向上—これも結果として、ともなうのかも知れないが—ではなくて、世界の変革と生命の可能性の実現なのである。

人間は、本来「陽気ぐらし」の可能性を与えられた存在である。しかし、元はじまりの真実や親神の思召に気づかない人間は、「ほこり」の心遣いを積み重ね、本来あるべき姿とはかけ離れた世界を形成してきた。「ほこり」の集積が、本性としての「陽気ぐらし」の実現を妨げているとすれば、人間の本性は「悪」ではなく「善」であるというべきだろう。しかし、ここで戒められている「ほこり」の心遣いは、決して軽いものではない。「ほこり」の教理は、極めてシンプルな言葉で分かりやすく説かれているが、シンプルで簡単であるからこそ、毎日の生活のなかで「ほこり」を意識し、これを避けて生きることは難しい。

「ほこり」の教理を真摯に受けとめるとき、反省することなしに毎日の生活を振り返ることはできないだろう。「ほこり」は人間の本性ではないが、普通の社会生活を営む人にとって、避けて通ることができないものでもある。

まず、「八つのほこり」の教えをもとに自らを反省し、人間は「ほこり」を積む存在であると自覚する。これによって、親神の「教え」をもとにして、自分と世界の真実の姿を見つめ直すことが可能になるのである。人間は「陽気ぐらし」の可能性を与えられた存在ではあるが、「ほこり」を積む存在であることを自覚し、これを除去する努力をすることなしに、その本来の姿を実現することはできない。これまで気づけなかった「ほこり」の存在を意識し、自分の心のあり方を深く懺悔する。こうした意識の転換ができたとき、はじめて「ほこり」をはらい、「陽気ぐらし」世界の実現に向けて、一步を踏み出すことができるのである。

【展開編】

森洋明

親神が待ち望む「陽気ぐらし」に反する心遣いは「ほこり」

と教えられるが、これは一種の比喩的な表現である。このような比喩的な言い方は他にも「大工」や「棟梁」「かんな」と言った建築に関する用語や、「肥」や「種」「田地」など農事に関する用語にも見られる。教祖がこのような表現を用いて教えを説かれたのは、当時の人たちに少しでもこの「最後の教え」が分かりやすいよう、また親しみやすいようにする親心からである。

「ほこり」は日々の生活で積もるので、それを取り除いてしまうことよりも、絶えず「払う」ことが重要である教えられる。そこで講座では、現代社会における「払い方」について考察を試みた。

ほこりを払う方法として、「いのり」と「たすけ」の二つ方向性に分けた。「いのり」は言うまでもなく「つとめ」であり、特に朝夕のおつとめを通して、自身の心遣いの反省と日々享受する神の守護に対する感謝の再確認を励行する。こうした自己にかかわる「いのり」に対して、病気に苦しんだりする人々や世の中のさまざまな事情に向けた「お願いづとめ」という他者にかかわる「いのり」も重要である。

一方「たすけ」は、おさづけの取り次ぎや一言の話などが考えられよう。天理教の布教方法としては「神名流し」や「路傍講演」「戸別訪問」などが一般的であり、元なる親の存在を伝え、陽気ぐらしの教えを説くことは「たすけ」の実践にもつながっていく。ただ、今日の日本における布教伝道の現場では、話を聞いてもらえる機会は多いとは言えないのも事実であろう。宗教に対する社会的なまなざしや価値観は時代とともに変化する。

私が関わっているコンゴの伝道の現場では、現在の日本と比べると、神様の話は聞いてもらいやすいと言える。初めて訪れた家や病院でも、おさづけの理の取り次ぎの後、一言の話を聞いていただけることが多い。一昨年、ある村で行った野外での講演会では、最初 30 人程度だった聴衆が終わる頃には 100 人近くになっていた。こうしたことはコンゴの宗教文化であり、また宗教に対する社会の見方だと言えるだろう。未信者を対象とした教会や地方の布教所などで天理教の講習会などを開催すると、受講者の中から、教えに触れ入信する人もいる。

伝道する地域のニーズに合わせた方法は、比喩的表現として「ほこり」を用いられたように、場所や時代、あるいは伝道の対象となる人たちに合わせて教えを説く、教祖のひながたに呼応する姿勢でもあるだろう。

また、直接的に教理を説くことはないが、さまざまな活動を通じてできる「たすけ」もある。とりわけ、昨今さまざまな分野でその需要が拡大しているボランティア活動は、教えを伝えたりすることは直接にはできないかもしれないが、それでも親神が一番に待ち望んでいる「人をたすけるこころ」の具現であることには変わりない。

世界一れつ陽気ぐらしを目指す教えの根幹は決して変わることはないが、それをどのように伝えていくのかについては、教祖が、分かりやすいようにと工夫された「ひながた」に学ぶ姿勢も大切なことではないだろうか。